



# 存在と記憶の 距離感

第二話  
オペリン

真希と初めて会ったその日、あった後に何をしたのか、まあ遊んだんだろうけれども、具体的に何をしただとか、どんなふうに打ち解けたのかだとか、何も覚えていない。思い出そうとはしてみたんだが、どうにもこうにも、思い出せない。ただ、まあ、仲良くなったんだよ、うん。大人になってお見合いでもするっていうんだったらさ、それは「ご趣味は？」なんて感じに探り探りになるんだろうけどさ、子供は初めて会った子とでもさ10分くらい砂場で一緒に遊んでりゃ自然と仲良くなるじゃん。そんな感じだったんじゃないのかな、その時も。

会う前は正平から聞かされてた非行話にビビってたけど、実際に仲良くなってみると、真希はすごく普通の子で、いい子だったな。そう言っちゃうと、なんか月並みな感じになっちゃって嫌なんだけどさ、自分やそれにまつわる諸々の一つしかないはずのものが、カテゴライズされちゃうみたいでさ。でも、本当にそうだったんだから仕方ないやな。明るくて、すごく素直な子だったな。ただ、その素直ってというのが曲者で、真希はどこまでも無邪気で、感情にありのまま、つまりは奔放な子だった。で、そのありのままが過ぎちゃって、その部分でちょとはみ出しちゃうところがあったんだろうな。

で、真希のその「ありのまま」な部分は僕らとの関係の中でも存分に発揮された。例えば、遊ぶ約束をすると、僕等は学校があるから当然その後に遊ぶ事になる。でも、真希は学校に行っていないから、彼女からすれば朝起きてから僕らと会うまでの時間はちょっと長すぎるわけだ。で、授業中に何度も電話がかかってくる事になる。当然電話には出れないから、休み時間にトイレに隠れて電話する事になる（僕らの学校は携帯禁止だったんだな）。こっちが声をひそめて「もしもし」なんて言うと、もう向こうでふくれてるんだな。

「もー、なんで電話出してくれないの？もう3回もかけたのに。」

「ごめん、いや、授業中だったからさ。」

「真希朝からずっとヒマなんだけど。」

「いや、そう言われてもなあ。」

「ねー、授業サボって早く遊ぼうよー。」

「あー、いやさ、そうすると先生に怒られちゃうしさ・・・。」

「大丈夫だよ。一人くらいいなくなっても分かんないって。」

と、終始こんな感じなんだ。それでも何とかなだめて、やっと授業が終わって3人で校門をくぐるろうとすると、もうその校門の前で待ってるんだ。男子校の校門の前で

、金髪でパーカーにミニスカート、ルーズソックスをはいた女の子が気だるそうに突っ立てる、まじめな生徒達はビックリだよね。みんな目を丸くして、ジッと真希の事を見てる。僕等も皆に凝視されてる女の子に声をかけるのはちょっとためらう。

でも、ためらってるそばから真希は僕等を発見して、

「あー、やっと来たあ。めっちゃ待ったんだけど。てかさ、みんなめっちゃ見てくんだけど。」

大声で話しかけてくる。僕等は、そりゃ見るだろと思うんだが、本人はそれほど気にする様子でもない。僕等はすっかり気後れしてしまって、

「お、おう。ごめんごめん。」

なんて言いながら、1秒でも早くその場から離れたくて必死だ。

「じゃ、行こうぜ。」

「うん。で、どこ行く？カラオケ？」

僕等の学校はそもそも寄り道禁止、ばれたら自宅謹慎という決まりがあったもんだから、こんな会話を先生に聞かれたら一発アウトだ。肝っ玉を冷やししながら、そそくさと通学路にそっぽだ。

しばらく歩いて、やっと同じ制服を着た学生もいなくなってひと安心、とはいかなくて真希はポッケからタバコを取り出し、火を付けようとしている。

「あわわ。真希、駄目だよ。まだここ路上だよ、せめて駐車場とか探さなきゃ。」

「大丈夫、あたしこの前ポリの前で吸ってたけど何も言われなかったもん。」

「いや、俺達学ラン着てるからさ、バレバレ。」

「あ、そっか。ごめんごめん。」

そして僕等は人のいない駐車場を探して馬場の町を徘徊するのだった。

そんな感じで僕、太一、正平と真希の四人でよく遊んだわけだけれど、この四人組がいつまでも続く事はなかった。まず、正平がいなくなった。彼女が出来たとかで、僕等と一緒に遊ぶ時間が無くなったのだ。付き合いが悪くなった正平に対して、真希は

「あいつ、マジで付き合い悪いんだけど。」

とか何かぶうぶうと文句を言っていたけれど、僕も太一も、特に腹が立ったとかそういう感情は湧いてこなかった。

「まあ、そんなもんか」

とか、そんな程度の感じだった。僕は

「こいつは自分に何かをしてきているから友達だ」

という様な考え方で持って誰かと友達になるわけじゃない。だから、正平が僕等と遊ばなくなったから腹が立つとか、もう友達じゃないとか、そういう気持ちにはならなかった。ただ、それ以降正平とは一緒に遊ぶ事もなくなってしまったし、彼の方でもつるむ連中を変えていったりして、何だか疎遠になってしまった。校内で会っても「おう。」

と挨拶するだけ。仲が悪くなたわけではないんだけど、自然と距離感が生まれていたし、お互いに何となくよそよそしい感じ。結局、高校を卒業するころまでには、自分の中では過去の人というか、すっかり忘れ去ってしまったな。

次に、太一も仲間から抜けてしまった。ただ、太一の場合は正平と違って、三人で遊ぶ事はなくなったけれど、僕と太一が疎遠になるっていうことはなかったな。真希がいない時には、普通に一緒に帰ったり、飯食ったり、カラオケ行ったり、今までと何も変わらないんだな。ただ、真希と遊ぶ時になると、

「今日は俺、用事あるから。」

とか何とか言って帰っちゃうんだ。今になって考えてみると、面倒くさかったんだろうな。三人で遊ぶって言ったって、特に何をするっていうわけでもなかったし、ただだらだらしてただけだったもんな。太一は賢い奴だったから、そういうのは無駄な時間に思えて嫌だったのかもしれないな。

それじゃあ、僕と太一が二人でいる時は何か有意義な事をしていたのかと言われると、決してそんなことはないんだけどね。同じ様にだらだらと無駄話をしているだけだったけどさ。でもさ、なんか、女の子がいると話せない事っていうか、男同士の会話ってあるじゃん。下ネタが話せるとか、そういう事じゃなくてさ。読んだ本とか

漫画が面白いとか面白くないとかさ、そういう話って、女の子はあんまり好きじゃないでしょ。それよりはあれが可愛いとか、美味しいとか、芸能界がどうか、下らないっていうと怒られちゃうんだらうけど、そんな話ばかりしたがるじゃない。やっぱり太一もそういうのが嫌だったんだらうな。

そうやって、いつの間にか四人組が二人組になっちゃってたんだけど、僕と真希はその後もしばらく二人で一緒に遊んでた。真希はちょっと退屈そうだったけどね。最初は男三人でハチャメチャな女の子真希のヒマつぶしのお相手をしていて、結局僕だけが彼女から離れずに残ったわけだけど、僕はどうして真希から離れていかなかったんだろう。そう考えてみると、僕自身が当時の自分の置かれていた状況にひどく退屈していたんだと思う。親や先生達の言われるままに一生懸命に勉強して、それが嫌で、反抗してみるんだけどそれも決められた枠の範囲を踏み越えない程度の「プチ」反抗に過ぎなくて、結局はいい子ちゃん、そんな自分にホトホトうんざりしていたんだろうな。だから、あるがまま全部無視してぶっ飛びまくっている真希は、僕にとっては「別世界」そのものに感じられて、惹きつけられていたんだろうな。

じゃあ、真希の方はどうして退屈しながらも僕と遊び続けたんだろう。まあ今となっては、というよりも今とならなくても僕は真希ではないから、そんな事は分からないんだけどさ。ただ、勝手に思いを巡らせるのは僕の自由だからさ、考えちゃうんだな。真希はよく地元の友達の話もしていたし、わざわざ新宿界限まで来て僕に会う必要なってなかったんじゃないかな、って思うわけさ。

真希は寂しさの塊みたいな子だったのかもしれない。両親の離婚の事、家出の事、援助交際してる事、真希はそういった事を隠さず、というよりは進んで僕に話した。

「あたしさあ、家出する前は母ちゃんとめっちゃ仲悪くてさ、毎日喧嘩してさ、めっちゃ殴られんの。顔面ボコボコにされてさ。母ちゃんが離婚したのはあんたのせいだとか言われてさ。で、家出したんだあ。」

「ふーん、そっか。大変だな。」

「学校行くと家に帰されるから、学校も行かないんだ。」

「じゃあ、今、どこに住んでんの？」

「今はね、おいちゃんの家。」

この時僕は「おいちゃん」なる人物が誰なのか分からなかったし、真希に聞く事も出来なかったけれど、今考えてみると、真希の元父親の事なのだろうと思う。

真希は携帯を2つ持っていて、僕は不思議に思ってなぜ2つも持っているのか聞いた事がある。すると真希は

「ああ、これね。売りやってるおっさんから買ってもらった。」

あっけらかんと答えた。

「売り？」

言葉の意味が分からずに問い返すと

「売りって援交の事だよ。でもね、やらせたりはしないよ。それは嫌だから。」

そう言っていた。僕はいつも通り

「ふーん。」

そう言って話を終わらせた。

セックスをしない援助交際があるのか、はたしてセックスさせない15歳の小娘に携帯をタダで買ってあげる気前のいいおじさんがいるのか。当時も今も、僕は何とも言えない。何故なら、そんなおじさんはいるはずもない、と分かっているからだ。僕は真希を疑いたくはなかったから、その事について考える事をしなかった。そもそも、重大な事は真希が身体を売っていたのかどうかではなく、セックスしたにせよしなかったにせよ、そういう行為をしなければならぬ状態にあったという事なのだ。そして、僕の心に引っかかっているのは、そんな真希の話に僕はただ「ふーん。」とだけ言い、一緒に居ただけだったという事なのだ。

15歳の僕は、「そんな事、やめなよ。」と止める事も、叱る事もしなかったし、「僕がいるから大丈夫だよ。」と慰めてあげる事も、真希を黙って抱きすくめる事もしなかった。ただ、「ふーん」と言ったきり黙るしかなかった。今、22歳の僕ならどうするだろう。抱きすくめて、セックスするかもしれない。あの時15歳の僕がそうしていれば、真希は拒まなかっただろうと思う。しかし、当時の僕はそんな時にどうすればいいのかなんて分からなかったし、そんな方法があるなんて思いもしなかった。もちろん、セックスという言葉は知っていたけれど、それが自分の身に起こりうる事だなんて、思いもしていなかった。自分とは何の関係もない、別世界の出来事だと思っていた。だから、ただ黙って、心痛めている事しか出来なかった。

さっき、今の僕ならやっちゃうかもしれない、なんて恰好つけて言ってみたけれど、実際はたぶん、あの頃と何にも変わらずに黙りこくってしまうんじゃないかと思う。そんな時にひょいと簡単にやっちゃうのは下衆な行為だ、って思う気持ちがどこかにある。かといって、気安く慰めるのはもっと嫌だし、わかったふりして叱るのなんて鳥肌ものだ。今後、年食ってからも黙りっぱなしだとそれはそれで問題なのだろうけども、それでも暫くは、このまま黙るしか出来ない男でもいいんじゃないかと思う。

真希は寂しさの塊のような子だったと書いた。そうだったから、ただ黙って話を聞いてくれて、自分に都合の悪い事を言いそうもない、見方でいてくれる僕と一緒に居たんだろう。ただ、ここで言うておきたいのは、真希は決して弱い人間なんかじゃなかったという事だ。僕にそういう話をする時でも真希は一度として泣いた事はなかった。なんでもない事のように、いつもの調子で話した。

僕はすぐ泣く女が嫌いだ。泣く事を手段として使って、聴衆に訴えかけ、媚びる女が嫌いだ。嘘臭い、というよりは嘘吐きだし、汚らわしいと思う。その点真希はありのままで、潔く、演じる事をしなかったし、僕は彼女のそういう所を魅力的に感じていた。

そんな真希が涙を流しているのを、一度だけ見た事がある。

あれは真希を教会に連れて行った時だったな。僕はクリスチャンファミリーに生まれて幼いころから母親に連れられて教会に通っていた。で、14歳の時に洗礼を受けた。ただ、僕自身はそんなに熱心な信仰を持っていたわけでもないし、毎週欠かさずに教会に通っていたわけでもないんだな。だから真希を教会に連れて行ったのも伝道しようとかそんな底意があったわけではなくて、何となく話の流れで一緒に行く事になったとか、そんな事だろうと思う。あんまり覚えていないんだな。

その日の朝、真希と一緒に教会に行って、僕は教会中みんな顔見知りだもんだから、みんなに真希を紹介して回ってたな。

「友達の真希ちゃんです。」

とか何とか。真希も愛想がいいから、

「こんにちは。真希です！」

とかまあ、そんな感じで。で、教会だから当然礼拝があるわけね。その礼拝では讃美歌を歌ったり、献金したり、色々あるんだけど、メインは牧師先生の説教（お話）な訳ね。その日もいつも通り説教が始まって、僕は

「あーあ、だりいな。早く終わらないかな。」

って感じですぐさま爆睡しちゃった。で、目覚めると説教が終わってて、説教後の讃美歌の時間になった。で、隣に座ってる真希に讃美歌のページを教えてあげようと思ってさ、真希の方を見たんだ。そしたら真希、黙って泣いてた。僕はビックリしちゃって、だから今でもはっきり覚えてるんだけどさ。

礼拝が終わって、二人で教会を後にして歩き出したら、真希が

「牧師先生の話聞いてたら泣いちゃった。」



って言ってちょっと恥ずかしそうに、でもにっこり笑った。僕は

「ふーん、どんな話だったの？俺、寝てたから全然分かんないんだけど、そんな感動的な話だったんだ。」

って聞いたんだ。そしたら真希は、

「うーん、真希も話の中身はあんまり理解できなかったんだけど、聞いてたら勝手に涙出てきた。」

だって。

牧師先生ってやたらと「救い」とか「あなたはそのままでいい」とかそんなような事を言うんだけど、やっぱりどう考えても真希は辛い状況に置かれていたわけで、そういった類の言葉を必要としていたのかもしれない。まあ、僕は真希にそういう言葉を言ってあげる事は出来なかったし、牧師先生の言葉で真希が本当に救われたかどうかなんてわからない。でも、それほど辛い中で、真希が普段は絶対に泣かなかった事、その真希の強さは変えようのない彼女の魅力だったし、僕には眩しかった。そして、その眩しかったっていう思いは、今も僕の頭の中にしまっていて、時の洗礼を受けてその純度を増す。で、ふとした瞬間にきらりと眩しくて、僕は真希の事を思い出す。

とまあ、一応真希の話はここまで。そもそもこの話は蘭の事についての話だったんだものね。流れ上、真希の話は避けて通れなかったんだよな。はい、いよいよここから蘭の話がはじまります。どうぞよろしく。

## 存在と記憶の距離感 第二話

<http://p.booklog.jp/book/18761>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/18761>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/18761>